繪本孝感傳

六

へ13
3581
6

門 へ13
號 3581
巻 6

フネイ

早稲田大学図書館

繪本孝感傳卷之六

目錄

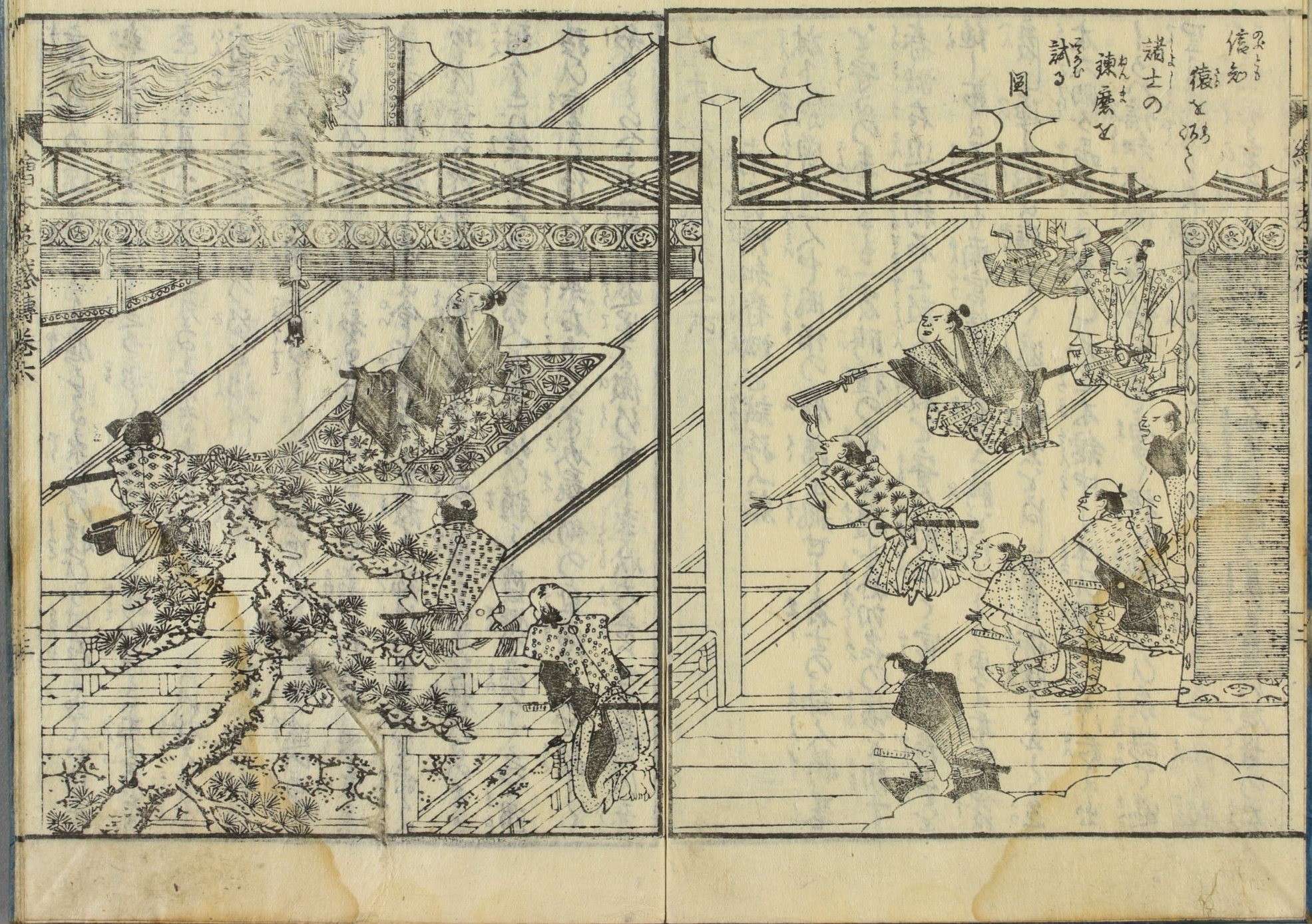
新宮信加春謀と成淳小張
信加猿と戦て法士の陳慶と成圓
春城の戚族奇遇と張小張
忠臣史婦相如と馬子圓
忠臣霜小傑陽侯と勝圓
春城南宮家と佳子張
異人盤宴と丈夫子張

賊首奇雲とトする図

同其二

南宮信知春城を試孫の話

林下未曾見一人也風俗の靡落を嘆せし名士の詠人情塞を守るの志なるも一変聘禮の夢さ遇ぶ必功名の情を動す春城右迎ゑ初石上散人の教を守り閑居と官途の希望を絶し所ゑ不國も南宮信知の夢さ聘をはしより更ゑ夢の事を慶じ逸ゑ微ゑ應じく遠ゑ徒ゑを以し誓言排曉ゑ及くゑ本大助ゑ居ゑ夢ゑ知りしゑ本館中ゑ伴ひ嗣君乃御前ゑ出しゑ信知春城と御饒ゑりて南ゑく祝を施し孫ひ家謀て遊望ゑ流涕し不虞の禍を引出さんとせしゑ天助ゑよりて御ぶ赦と喜ゑ流涕ゑ分れゑ出ゑ加之忌隙の葉を棄ぐ疑骨の太


信勇
猿を
諸士の
練磨を
試る
図

言を勧め速に招きに應ずる条件乃好びうけ存に出んやはまた
ず今日おのれ孫信を宣め永く君信の義を弱び忠を本意な
まじども某赤子の身なれば者事を宣むるの能はざる弱く東ぐ
賓客となりて城郭の弱を結びしと願に奥命ありしうがんを謹
で命の尊きを謝し居めしく宮子細ありて永く宮途の帝を
絶くいひしぶ士に己を知るものあれば死しとも悔ぬ君の恩を長
曾の臆に徹し速に命を領せよ奥く孫信の貴孔を希に
ゆゑび冀は終身君の側にありて微忠を盡さん事を願ひるのこと
到なまば信和を差其為人を好び弱び強く盛解を使くこと遇
弱び重く待ゆるは某右近ゆ事ぬ藝術の卓絶なるを親しく
知るとなくとも暴に拾置に徴行せ事状大丈夫に及べき

長の面くへ事形に出ぐさに行ゆ孫び右近ゆ藝術に鍛達せし
事行を能としてう若述べさとゆしく集西の通見く弱ひしぶ
立本大助席を進ぐ件事基場し君の使弱人所の猿能人忠居
実を伺ひ武術の巧拙を知る事熟に人に賜まる事国君の知らせ
弱ふ所るり他を右近に授せ弱ひ吟ゆる練磨の稽を試むに
見り見ば座中の一真にも非ず恐しく若ぐまば信和は事最よし
とくゆを指弱に應じく一の小猿弱事り信和の侍筆に異
事る件春塚御前に向ひ居君命に拾くき敢く辞ぐる所
況しとへ申せども未他ぐ能を知ゆ使ぐ敢ば先候人に使くその
状を見せ去ら弱へと若に信和奥もと左右を形を弱へぐ結座
の諸士一人づく廊ゆを揚く使に彼猿是を見るようつくと

歩行する所を丁度打ち殺くも身をかはせども其扇子を奪ふ状
恰好練熟の者の拳動よ似たり座の次第滑らかにして流暢
猿を打手終ひに形よ立木大助法のごとく扇子を揚
しこれ猿奴喝と叫んでを奪ひ法ども立木が術前の諸士の新つく
必ず驚くことを知るべし春城角と見るとう歩の座をもて
曰く扇子を揚きび猿者々く春城を見べるり春城遊び能者の猿が扇を以
奪ふよそ〳〵ひやと見るよ春城遊び能者の猿が扇を以
て頭と撃ち猿方よ遠く頭上の扇子を掴むよ能ひ能して遂
に信知方よ猿じ孫ひ菓汁猿をゆくとう以来遊戯よ絶く
殊く諸士の練熟を誠よ其術未熟のものよ遇ひ必其技不
の物を奪ふ術精妙を極く化を変ゆべき者よ遇ども敢ても

機を知く能て側よ立ち寄ひ給よ今師が練達を測知ひ
ちく春城と勝負よ成ども後初く勝負しを受るの
形状方よ弱方よ変ーを示ひ〳〵に藝道神よ入信時虎丸物り
庭〳〵に迫るさの封用をゆる事介的の事柔是を挙て夢人
よ大君許宮ー孫ひ成るの理白しと満面悦びの色を表ー孫人
ぞ座中の面も更よ春城が武術卓絶よ驚伏ー前日
師弟の約をもて教を受るもの数人春城是よ於く大よ失
因と為ー彼よ臣下の礼を執ー日〳〵よ能よ出でる
春城の感嘆寺遇を悦び話
形て日を逐く南宮伝新兵師一流の事畢本国よ帰去の
ひく春城右近が一件を具に言上ー孫ひ〳〵大君光源寺

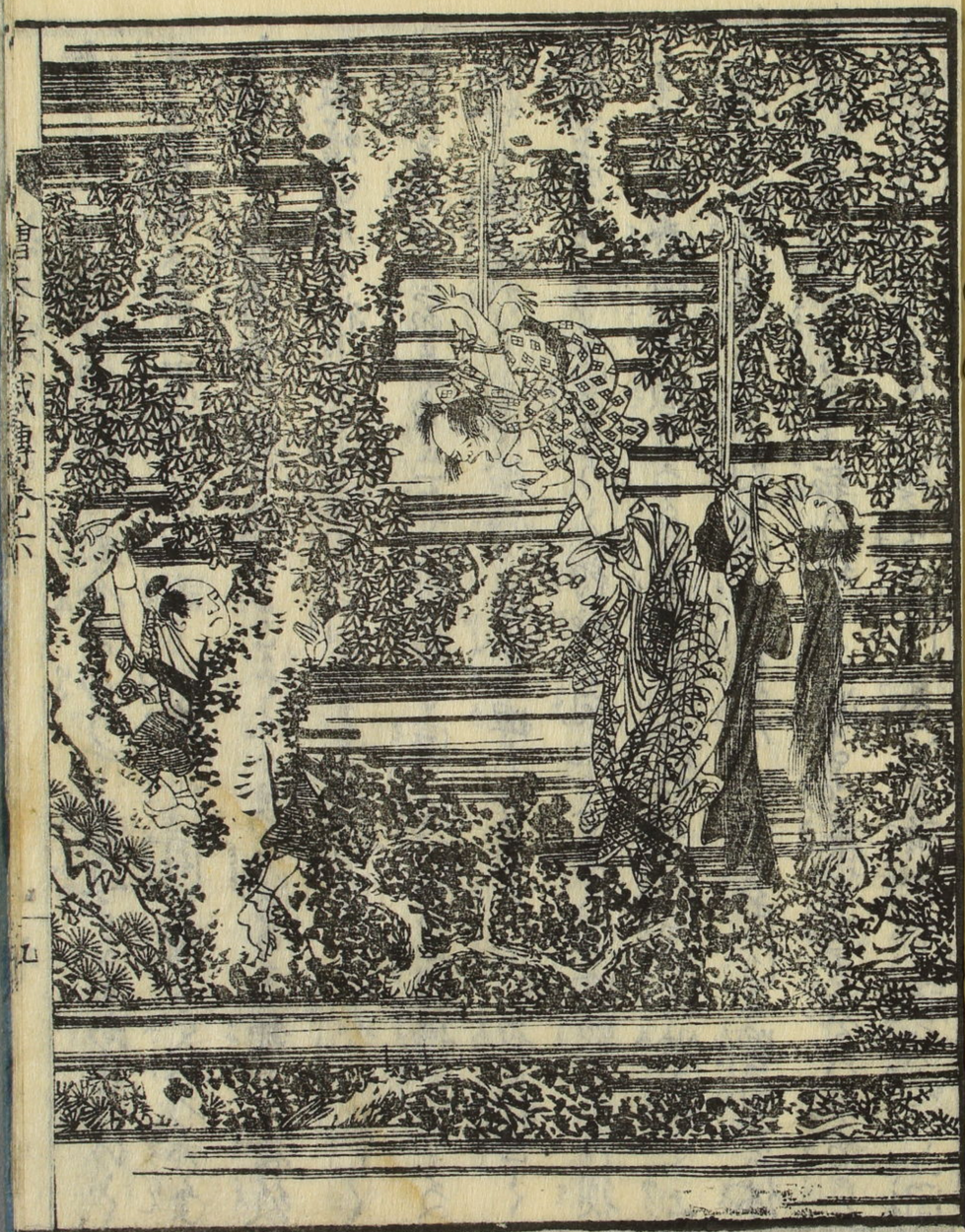
春怜史婦
栢女丁
遇ノ図
絵本孝感傳巻六

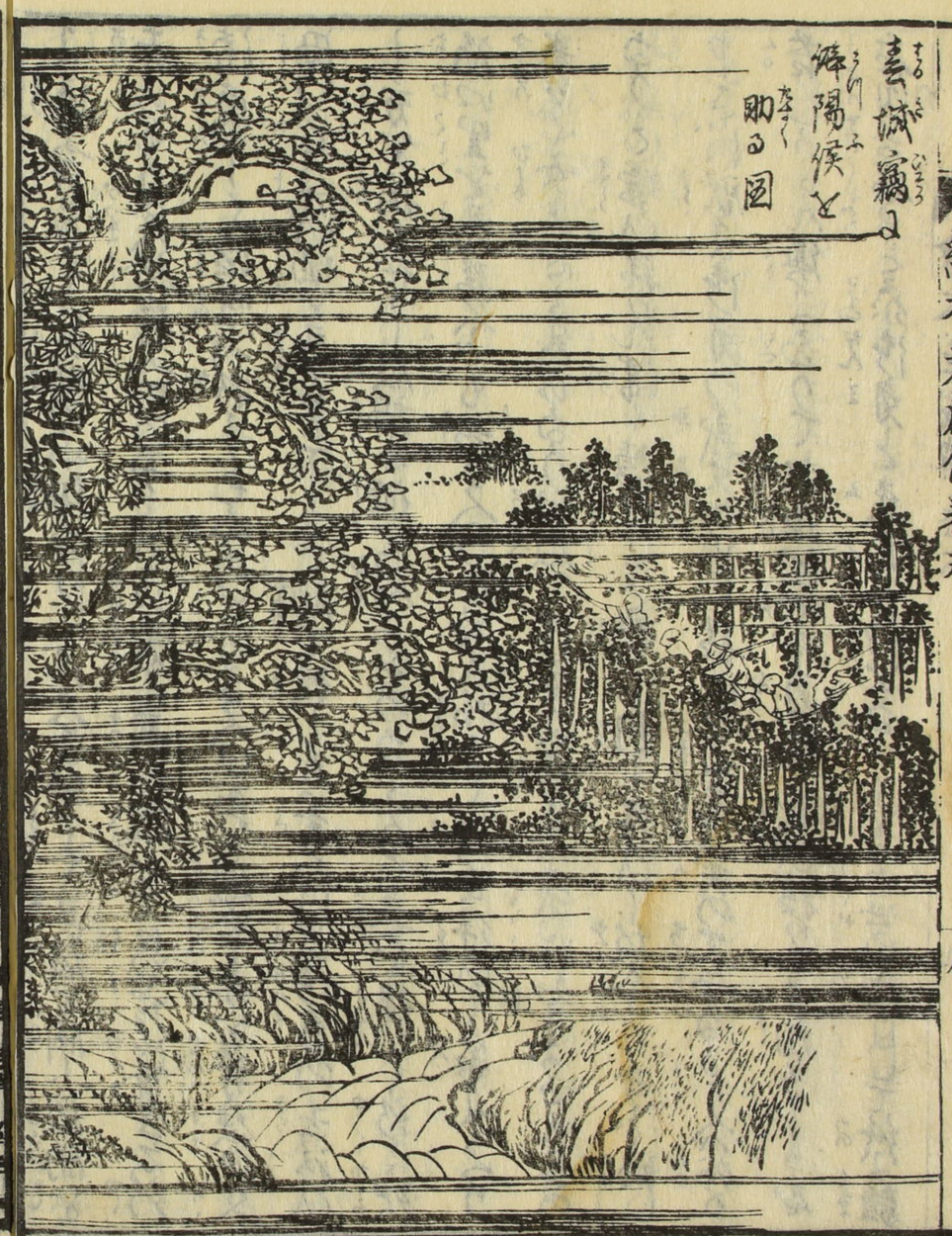
伝郷は沙弗び斜ゐ〻び新知武百石を汲く側汲よ石抱らる
ゐ〻こよ定めら迄三木大助より乳れを汲く妻媒右近へ貝命
の新を達し且説春城右近八南宮の嗣君京紋弩ゐる云
後縁め張弓の汲結を図し再交の苦を結居らるよ不日しく
三木ゐ方より奉書多朱せ〻ゐ東ゐ志を南一生人事の涙
茅を岳家ゐ吉環諸大吉辰を撰んで華陽と貝途〻重坂
の関路を渉ゐ刃〻く過ゐ〻東の張ゐ赴むくんぼゐ弱ゐなう
祇ゐ茅ゐ山路を分紙たるゐ〻と事爰青雲の志を汲たる
の容路ゐ迄び心中自慰〻として湖面の葉るゐ岳湯四云楽
事を想猿山ゐ打刺ひ〻き年華の移易を欲ゐ互ゐ厭〻ゐ
話〻ひて汲〻美濃国今浪の沢を紛沙傍ゐ流れる樹林を見て

勿其牙の首を懐ひ潜鈍と〻く数汲の涙を流し環ゐ考こ有く
良人狼若の中ゐ汲る時ゐゐ未結る迄を嘉し張ひ沒く未頻
汲る便を汲ゐる打〻汲の挟宗あ〻て汲ゐ不論の迄を図し張ゐ
や右近杖を止く側のゐゐ侍初を改め〻く言ゐるハ某ゐ独る変ゐ
汲ゐ〻く沙方ゐハ未苦ざるの縁故汲ゐ甚ゐ細と云る吾父生ゐ流
涙ありて汲地を通ゐ張ひ〻時一の縁故の出来ゐて家を汲迄るゐ
旧家小播氏の養ゐ送ゐ張ひぬ家彼家ゐ養ゐるゐ数年ゐ
〻ゐ拾弐歳の時不図ゐ溺げるゐ細汲ゐて彼家を逃迯ゐ示浸ゐ
ゐ吾伝ゐ絶ぬ汲〻ゐ愛育せゐ国「義父母の法図ゐも頼せ汲ゐ
ゐ所志を逝ゐる為邪を拵ゐ已び流を催せゐゐ別ゐ捷云云
事ゐゐゐ汲ゐ張弓〻こハ良人の作ゐも吳人汲滅亡〻を拵ゐ張

つゞ一家彼妻又如りて貧人の耗屋を問ひ家の面を謝し孫うんと何の怪うゆうんと理を盡しく諫しうべ右近既を揮家面獨家とのゞ
まて一のこるゞ彼家一女子ありく妻ゞこの云ひり且女子も
孫撫の中より孫と家を纂ひて潜しも側を離ゞ止ゆを忽ゞ伴ひ
て家を出是る林下と捨て去ぬ元來幼稚のこのる事を拙
と思るゞこるまゞ巷と漂ひて物何るる事の因を受たるも知る
ゞうゞ父母の家を恨こ孫ゆる如何斗るうん彩る妻教の
所行を怨しこの罪を謝したりとく何で寄こゞのたりうんや孫
之と問て面を動うゝ今の清語よて妻も之ひ者る事ありとも称
の因ろ一の小細を取出し良人遁き孫ゆ持ち物を取く女子就樹
間と結ろ垂孫ゆ何らゞや右を心理呼りるゞこを取く熟見る

と遠ゆ言るく其時の小細なりしゞ大と驚るく其故を問ゆ擬面を
赤らめ良人捨孫ゆ面の女子ゆ是之其時推ゆと兵を宿清身ゆ孫
清暴しく泣呼ゞ打しを今の父母る人ゆ面を通合妻を另使け父
母の名及び栖を弱らまてうど知て孫とも苦ゆゞ兵清身の去孫ひ
し方を指ゞせし故栖を栖を教るこのるうんと妻を撫く訪く訣
清ゆ里を弱孫ゆども知る人の何ゞを植る紙と伴ひて家よりう
参く女とせうまひるりゆ故を清身ゆ苦さゞ素性望ゞこさこの
うう〻と嫌ひ孫うん深く隠せよと堅く制し孫ひし故今日まゞ明し
やさゞ脱と清身の我父母と孫ゆを妻妻の父母るうゆ何う
苦しうん偽と知りて耗屋を問ゞ右近と孫清身と文妻の約を
右近之孫ゆこ悦び孫うんと勧めしうゞ





長城竊み
陣陽侯を
助る図

屋ろづくと言ひ〜師の教令を受りて其遠ざるを為きりのく
共に彼方より取り販社の眼を謝し汉来再び国を辞ぜ父母の元を
を安じく孤弟分の恩を報ずることを人くるの乏りと雖く衣紋
を取結ひ袴を着じく小幡氏の門前より流石華やかく
音信を絶てる家居なれ五〜容易も這入ばいの迷好便宜もなる
とを〜踏躇ひ〜もに拾俗の婦女小婢とたよ戸張の衣を拾出く
日映を常るひり二人立ちよりく勅静と問んとするよ婦女熟二人共視
て涙ぐみ春城氏彼方るるい環度るるばや永社に国の賊寨と生
〜尾上と云し者ありし別の後安居也ひとりよりし墨国を体
を見し事ひの安ろ立よ新人家も不測よ山寨を通ま人ひ安堵を
ひとるせり中山方へ入孤ひ迎に云し夏なも話合んと誘ひ発く一間

よ請じ入ま立び右近先生を尾上の縁故を弱ぬり
ひ則我母の妹女栢女ありは是よ能く互よ奇縁の不測ある状況
び栢女立人夫婦よ彩と若ま立び夫婦遠〜出ありて化出稚
ぬるく兵衛右近環ぶ墨国よ出長不国弦髪の約とる栢女を
收ぶ〜くの離巨の隣邸を新ぶ連日家よ遣く千葉の問ひを
旅り山海の盛饌を設て懇ひそ遇ける

春城南宮家よ仕る話

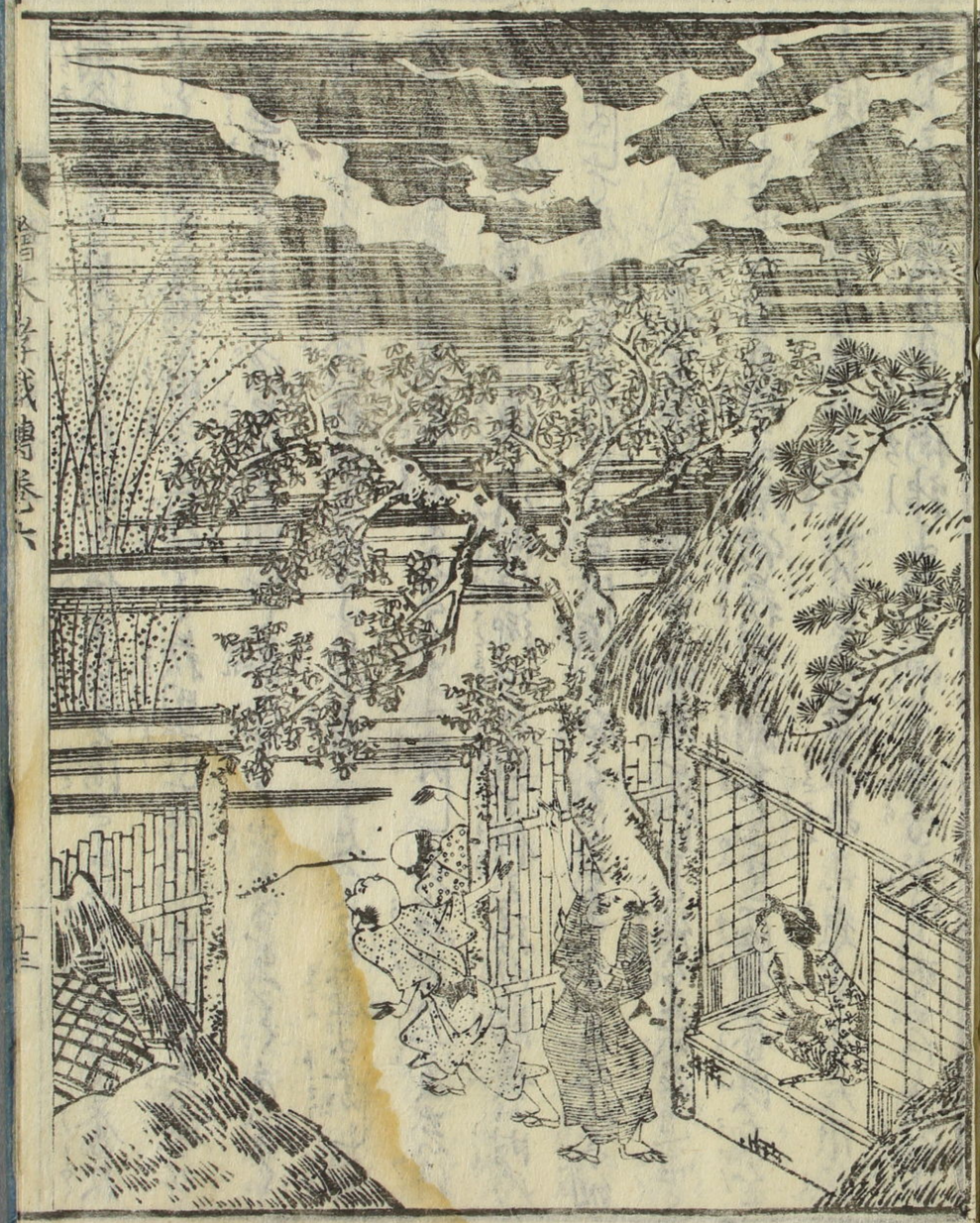
栢も右近環ぶ宿国をぶ〜く岳家父母再会〜不云も数日
を過〜ぬるり彩緑を浴く家と夏ひ合く外姑の救ひよ嘗ま
示後夫人が母と〜孤苦日の恩を報せんと義父母よ言く栢女と
共よ旅設〜く家を出ま立ま中ま〜く特治の彼方る親者坂の様ひ

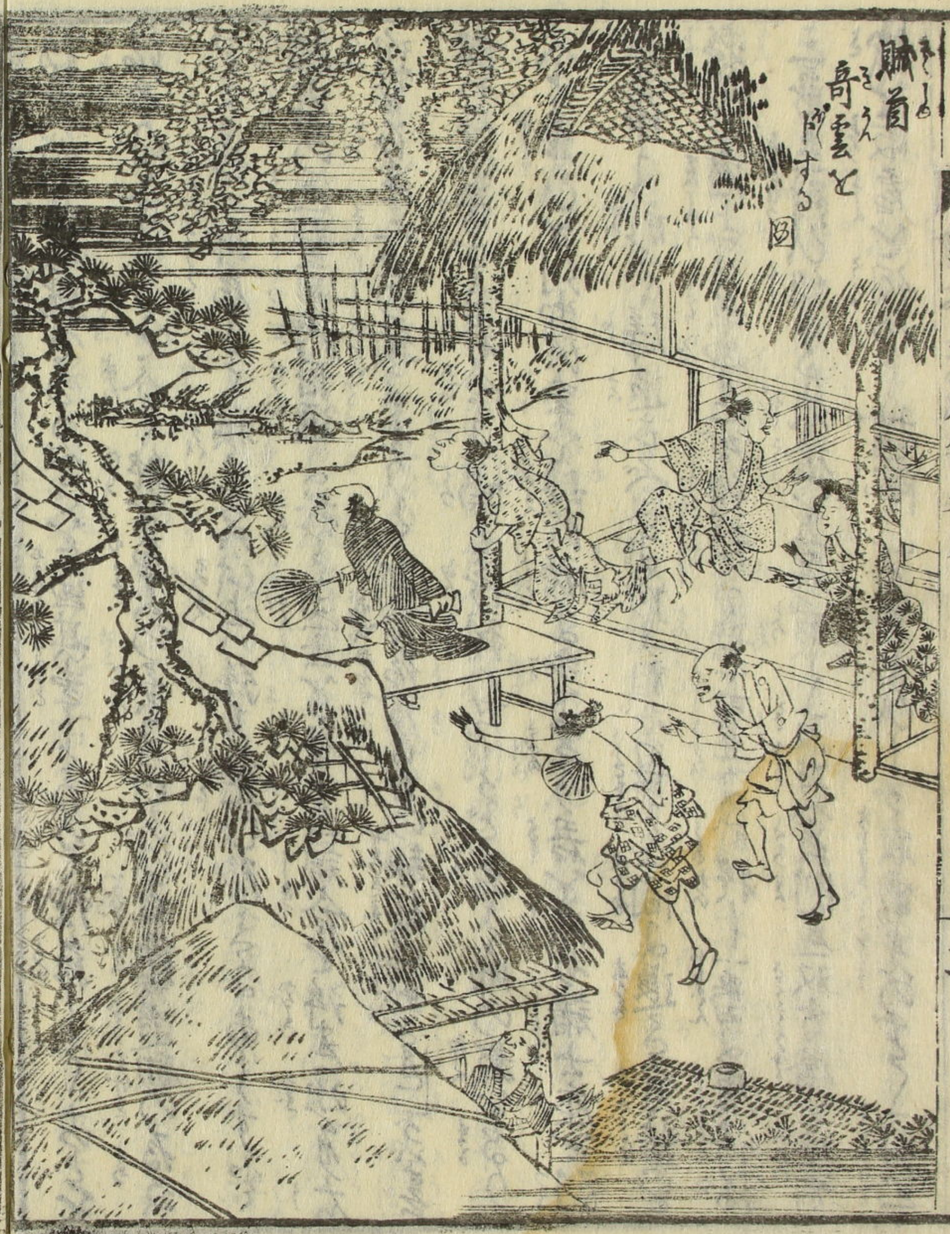
宿しるるゞ其夜半の頃山間より男女の泣叫聲遠く長く聞ゆるを
らゞ見しゞ在辺耳を凝す而山賊等行人を悔ひるものゝ影
こゝも住附と呼び出さゞ物を恐むを慕ふ遠ひ山賊の所為とも見
間をうけ人員を数を撫ゝ行見るゝ寄ゝ遠ひ山賊の所為とも見
へゞ義を男女を結ひ例り本の枝ゝを切るゝ枝ゝ別ゝ数あり
んと五六人ゝ色目所其義を状を見るゝ寄ゝ大ゝ
ようひ上ひ引下ゝ縁放を間ゝ引ゝ幸ゝを意ゝ
て人の義と表通ゝ本義を黒の提ゝ引若を更統ゝ
命を頭ゝのゝ流ゝ言ゝ切ゝ在辺二人の長状を吹ゝ後来
を戒ゝ近ゝ老ゝ遠ゝ二人再生の良を泳ぎ悔ゝ後もゝ尚
をうけ行方ゝ遠ゝ三ゝ引ゝ浸在辺南宮家ゝ列

四精勤敏て急ゝ眠日を数人の門生を集て技術の練熟を試
むえ其義人殺明盛夏るゞ人駒君の驚居して弟ゝ秘法
陰術氣体乃練熟ゝ人と教ゝ最遊を遊ゝ潭中
峯て弓数ゝ来数月ゝ遊ゝ其間を棄ゝ教ゝ者牧養に
遑ゝ是ゝ於ゝ蚩家の潭中武義の師範ゝ唐海彌三郎
鉄田有在清ゝ不ゝ義相集ゝ高議ゝ遊ゝ其義不肖ゝ
とゝ武義を仰ゝ孫を学ゝ互ゝ水奥の間を落ゝ者
一流を潭中ゝ廣ゝ遊ゝ計駒君の吹峯ゝ春嫁を
石抱ゝ示来潭中の面ゝ時の勢ゝ河ゝ遊ゝ渠ゝ門人ゝ遊ゝ後来
数場を開ゝ其名を基数実ゝ渠ゝ威を振ゝ遊ゝ所の面目
ゝ人ゝ面を対せんゝ遊ゝ幸ゝ人ゝ幸ゝ数を挫ゝ遊ゝ名ゝ要な

らんと勝を揚へ弟を合せて示談良附を強いるの中なも壹巧
ある唐崎彌二郎進を出某熟男なる京都の名家在りて武
門輻湊の地なり春城寛の武藝を達せば紫二十なるを仕度
と思ざるの程なし男なる以前の僥倖なりて嗣君の同なる
たるまでよく寛の未熟の給をるえんを必せり兄爾り長
金義せんとう渠と武術の仕合を形ひ別座の切なおなく單的
なる能原とをのるこそ迫るるうんと奥氣の湯田三木の壯士を
雛く一紙連署の狀書を張めけ友石出さまてる春城右近一流の
練達仕りあるよりあり未熟の私代僅彩の右試合の義法許
雲ヤ仕るべきの右光居中の弟出りよえ求大家の返よるを
の面るるまで渠多ゞ儀執よう記るるを早くも帰り彩てい

後来遺恨の端とるるべきを面其幸とるるく程無しく十をを
治めんとせりうど金く能を事なの家なのいで音義遊別のるる
ヲと再三押忍しく頼りうべけ上に強く止む能さるあるずや
披露の上翌日御目通なを於く二士を右さま試合を許さ次分右
近を召ま二士の頼よりうく試合仕付らるの新親仕出さま」ろば芸
城いをひ寄ざる君命なを唱と法別いせりうど義く師の教をなり
人と事ひを引出仕事と好び脱なを幸宮り君を始め諸士座を別
ぬる中なを於く辞退をべさるなのうねを畏く一間なを退さ刃装を
整く座上なを出まで待被さる二士互の武技一番なを唐崎泳
二郎三郎人組る未捨を却つ而く友右三別を双方捨を捨て
樣を取者を何つく稍階しあやうひしが双電光のごく二対二





脚首
奇雲を
降する
図

討合ひよと見へしが春城も槍を持ちて勝負いかにと舎利
〳〵前なる槍を取よせば続く萩田有右衛門三郎吉俊が
ゑ並異なるよりてば兵二郎はして異んずと嘗よりてくゐいく
実をしらびの辣の春城もいかにらひ弟くなる虚よ際し実
なる槍と表へ開き肩先をきてうよ実しうび右を八二度出後
きよ砕く撃ちし退くに時信卿は右近を砕き弱ひ勝負は時の
運はして偽労を見むるよ兵ば深く砕きとる事ろよる細
おきが試合は是を限とし退ひて休息ばしと伯父きは右近進く
とく退さきる次よ唐崎萩田を側をく左近安多春城右近
が辣廉とのとろ見やと命ひしうび唐崎萩田よ頼ばくさん作信
源と三舎試ひよ其術神よ入く中く居多ばぶ所よりば統中

兵今の三舎源が槍先居ばるもの中へ入事あ交結るを敵く事いば
きく勝を譲しは統血氣を制とる大丈夫とあいとりを萩
田通を換しぬよ彌三郎兵下は指別棄ぶく衆中ふて勝を
取くる事分ぬるよ伯父一騎よ右近を稱とるや弥三郎芸示
芸ひ兵下壮年よりく功を積事熟せば勝負ありとのこ名社兼
ゑる兵試よ技を見るべし若技とりく嗜候義くば服中るしば
試を命を頼しば試を手疾とるくん墓ゑるべしとりよ心付くあ
技を形きば名升を縫筋うり是を見るとろ先の廣言を砕滅面
別失のごくるりて春城が精辣よ休せ一体よ遇ゑきば伯卿は大よ
恨び弱ひ強三郎流石の老練はして統勝は大分とる事神ゆく
某国三を初きとも春城右近其才部進るを以く四切の三のま

酥を与へしと云ふ深恩を蒙し初めぬ由の遇しく寝初をも加
ざりしより今日列座せし者たちを変しく懇ろ仕賜ふの風学
とるさび深ぐ心を安らしむべし殊に試合を見そなる競を以来
偏に学ぶ者更を強んでなる出初を励まし為る方なく命令し
ふべ人く君の恩を休しと春城が温厚の心を感じ一人として奚
心を接せのなく宛も譜代旧更のごとく遇れば右近指く心を安
差藤勅しく霧遇日くは夢く移るく一男子を設ふ已が知名を
譲りく小次郎と字し内外第るの云のごとく安穏は数年の歳
月をぞ送りける

異人壺家は西夏を示し語
且説奥州岩手郡の内壺家の山を曠野を打潤そのこるべ

山林の利も三〜〜に南宮家封内はおのく最上等の古地と
故は豪農富民多く中なも小民と稱するものも西年は遇
て衣食を闕は多べ其豊饒なる事計多べしなるは本一
異人来り住く人のなるは吉凶を卜し或は符を授て病者を救
ひ其外遺物を探り射覆の術を施はは一とく其験のごとくな
らざる事なしさるさざる奇を好む人情なる故く諸の指示
所遠ざるを尊ありて卜を請人多の絶へるまなく絶ば去
るをとも暫く礼物を受次日は二合の麦を炊て食とし其他
の野菜塩噌等の人ども敢く食せざる是を以て寒は神仙の人
なりと稱しく為敬する事学者の宣聖を崇敬層の佛を尊
むよも如は勝を付く迎へ人も空しく其門市をなせりこれも

其二

夏の夕蓄村人ホ曲長宰と呼門番ヨ柵を乗び成い逃を打ちあるく
已拾くヨ納涼〳〵歩こうそるヨ南の山のまより一圓の天火光
来りをくるりて数馬数百ヨ分地ヨ頒ると日代しろ長崎消失
て流白し流人大ヨ形を変し是ヨ与るヨあらびと赤先ヨ呉人出
屋ヨ諸ヨ〳〵の幸ひり吉西地ヨと宅く爆問ヨ呉人戦結として袖
中ヨ募を取稍暫くあり〳〵係ヨ逸を変じ恤むし病むしと歎
息〳〵く止び流人差二聚るを〳〵ひ地ヨ物ヨくくと問ども呉踏〳〵ゆ
〳〵言をるヨと稍ひりて衆人ヨ対ひ今青の天変呉事ヨう
び今夜二更の後厲寺南方ヨう襲来り其ヨる西ハ老幼男女
大馬ヨ動るまぐ呉く疲形ヨ鼓ど三日を出び〳〵く命を頒び
若こを逃まんと思ぐ山地を去る事一里斗はして西ヨ書

るの山中ヨ潜厲寺ヨ至るを待暁ヨ到り〳〵く物事〳〵を命く
笑を通るべしあるヨ出を傷ヨる踵をめぐ〳〵ヨ者
是迄一ヨ言天機ヨりとの人ども問はるの好ひヨ出ヨ者ヨ悪
び用ゆると用ひざるヨ言信ヨ有るべし彼ハ猶ヨ者ヨ
逃迯まんと言捨〳〵飄然として〳〵ヨ去〳〵ヨ〳〵ヨ来老実ヨ有ヨ
ひ人ヨ幕〳〵ヨ問ヨ呉人の教示を受て疑ヨ鼎の沸ヨて〳〵く騒ヨ
出〳〵ヨる物ヨ取敢ず家後ヨ出ヨと老を扶ヨ知を慰ヨ山ヨを
〳〵く逃出び敢状大浪の押来り猛火烈風の難を逃ヨ勝ヨて
待接独同敢て言語ヨ尽しヨ〳〵ヨ移ヨ其後二更ヨ有
び一村の男女一人ヨ遺ず一の山中ヨ集り至ヨ星の方を見居
るヨ呉ヨ呉人の知ヨ遠び厲寺ヨ〳〵ヨ一帯の焼雲

南より起り北を過ぎて少し見るべきの吾を捲く星合
しゐ爲の天をくるりくるりと落雲に乗り星明りを考へを
差望よりおのづから生ずる仙地しくしく迫く仙家に通ずるの
何ぞ斗らん家々に積蓄する所の穀物金銀失とるべく小とるべく
く失ふべく家付衣類のみ僅に殘るべく家中の狼藉うべく再び
一驚し始めて天人の為に砕くべきを將の脇を爵ぐ悔まど
も詮なく幸の次第を具に縣令の歴へ新に其指揮をば待つ
者る

繪本孝経傳卷之六畢

明屠赤水著
東溪源謙校
考槃餘事 白紙摺明朝 快入本全四冊 文房賞鑒家必用之書也

題画詩刪 全二冊 題画詩選 全壹冊

奚疑先生撰輯
書畫比台宜 白紙摺明朝 快入本全三冊
書家必用の小冊諸君子常に案上に備置あるべき
甘の翻用卒く綱を分ち詩題重疊と殆くして絶句
聯句に云ふ更あり數字の半ば歸ふ多く
その徒らに撰ぶ漏さん載らんと欲する此書と披きて
其自在を得ぶべし賞ふ書を繁ぶの君子
必携の翰易の珍寶なる可し 紙小冊あり

書肆 大阪北久寶寺町心齋橋 前川源七郎梓